



流星とは何だろう？

流星とは何なのでしょう。プラネタリウムに来られる皆さんなら宇宙を漂う小さな砂粒のような物質が、地球の大気に飛び込んで光っていることをご存知のことでしょう。その起源が彗星にあることも今では有名です。流星と流星群は大昔から知られていましたが、正体が分かったのは長い歴史の中では最近のことです。

ギリシャの哲学者アリストアルコスは、流星は雷やオーロラと同じように気象現象の一種だと考えました。ところが、ペルセウス座流星群やふたご座流星群は、毎年決まった時期に出現します。晴れてさえいれば、コンスタントに出現します。そして、地球は太陽を1年かけ1周しますから、流星は宇宙(あくまで太陽を中心とした宇宙ですが)の同じような場所に素があって、それが地球に飛び込んで来るものではないかと考えられるようになりました。17世紀末から19世紀初頭にかけて、ずいぶん長い時間をかけて、そのような考えに落ち着きました。

彗星を起源とするものだという説は、流星の研究者、天体力学の研究者、彗星の研究者によって、ほぼ同じころ唱えられ始めました。1830年頃のことです。流星の速さを正確に測定することが難しく、彗星の軌道と、流星の軌道が同じであることは、なかなか突き止められなかったのですが、1866年イタリアのスキヤパレリによって、ペルセウス座流星群は、1862年に発見されたスィフト・タットル彗星が起源であることが示されました。このような天体を流星群の「親天体」と呼んでいます。スキヤパレリは、1877年に「火星の運河」を「発見」したことで有名になりましたが、天文学への貢献度では、流星群に親天体発見の功績の方が大きいでしょう。



ジョバンニ・スキヤパレリ(1835-1910)